

## 伏見城の発掘調査

(財)京都市埋蔵文化財研究所 担当係長 前田 義明

### はじめに

伏見城は幻の城とよばれることがあります。それは城郭部分が徹底的に破壊され、地上で城の痕跡を探すことはほとんど困難な状況にあるからです。また、伏見桃山城天守が元の場所を違えて復原され、誤解を与えています。他の江戸時代の城郭も江戸城と二条城など以外は、明治の廃城令で建物は払い下げられ除却されてもとの姿はとどめていません。伏見の桃山は伏見城造営以前、伏見山や木幡山とよばれていました。伏見城廃城後に武家屋敷を中心として、桃や梅の木が移植されて群生し、江戸時代中期になって桃の花見でにぎわうようになり、桃山とよばれるようになりました。そして伏見の町名は大名家の名前が伝承され、もっとも多くの人名が付く町といえるでしょう。現在の桃山(伏見山)は桓武天皇陵・明治天皇陵・昭憲皇太后陵の三つの御陵が築かれ、鬱蒼とした森を形成しています。御陵造営によって伏見城の城郭中心部は開発からまぬがれ、そして保存されているともいえます。そのかわりに宮内庁管轄のため、御陵の参道以外は一般市民の立ち入りは許されていません。しかし、陵墓公開運動も盛んとなり2009年2月20日に陵墓関係の学術団体によって立ち入り調査が実施されました。その結果、今までわからなかったことも知られるようになってきました。

### 伏見城の沿革

伏見城は天正20年(1592)、豊臣秀吉が伏見指月に隠居所を計画したことから始まります。その隠居所は秀頼の誕生によって、本格的な築城へと発展します。文禄3年(1594)には淀城天守と矢倉を移築したり、前田利家に宇治川の改修を命じたり、城下町造成のため社寺村落の移転も行います。文禄4年(1595)には聚楽第を壊して移築して充実してきた伏見城でしたが、文禄5年(1596)の伏見大地震(慶長の大地震)のため倒壊してしまいます。しかし、翌日には指月伏見城より北東の山上に新城(木幡山伏見城)の縄張りにかかり、翌年慶長2年(1597)には完成し、秀頼とともに大坂城から移ります。その伏見城も慶長3年(1598)豊臣秀吉の死去によってさらに変貌します。慶長5年(1600)には関ヶ原の戦いの前哨戦として伏見城が西軍に攻められ、守ってきた鳥井元忠の自害により、堅固な伏見城もついに陥落炎上します。関ヶ原の戦いで勝利した家康と秀忠は伏見城に入城し、すぐに普請が始まります。家康は慶長8年(1603)に伏見城で征夷大将軍の宣旨を受けています。そして、修理は慶長11年まで続き、秀忠と家光の将軍宣下も伏見城で受けています。元和元年(1615)に出された一国一城令によって、山城国は二条城だけとなり、元和5年(1620)に伏見城の破却が決まり、修理された伏見城もついに廃城となります。元和9年(1623)に家光が将軍宣下の後に伏見城は徹底的に破却され、天守は二条城へ、石垣は大阪城や淀城へ移築さ

れます。おおまかにみると秀吉による指月伏見城・木幡山伏見城、家康の伏見城という3期にわたって築城されたこととなります。

桃山の西裾部に広がる武家屋敷や町屋は、江戸時代以降、角倉了以による高瀬川の開削や伏見港の発展により、現代まで伏見の町として栄えてきました。明治45年7月30日に明治天皇が崩御され伏見桃山に御陵ができました。昭憲皇太后は大正3年に崩御されています。桃山山頂の西側は戦後遊園地となり、昭和39年に伏見桃山城天守が鉄筋コンクリートで復原されました。現在は遊園地のあった所が京都市のグランドとなって市民に利用されています。

### 発掘調査の成果

発掘調査は伏見城研究会・京都府教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所などで実施されています。各調査区で道路遺構・建物跡・門跡・町屋跡の検出、また金箔瓦の出土など、それぞれ特色ある成果がみられます。城郭部分は伏見城廃城時に攪乱を受けてはいますが、武家屋敷や町屋では比較的良好に遺存していると思われます。古絵図が残っており武家屋敷の特定には参考になるのですが、豊臣期と徳川期では大名の変更があり多くの課題を残しています。天守を中心とし堀に囲まれた城郭区域、城郭を取り巻くように配置された武家屋敷区域、京町通より西側に展開する町屋区域に分けることができます。

#### 【城郭区域】

城郭中心部は御陵にあたっているため調査できていませんが、城郭北堀で調査が実施されています。明治41年に陸軍第16師団が深草に設置されましたが、北堀が軍用の貯水池となりました。水は東側の宇治川からポンプアップされたそうです。貯水池はその後昭和13年に京都市に移管されて昭和52年に廃止されました。No.2(桃山町大蔵)は北堀公園整備工事に伴う調査で、堀の石垣が長さ40m高さ3~4mの規模で検出されています。石垣は花崗岩の自然石を用いています。No.24のキャスルランド跡では京都市のグランド用地に伴って試掘調査が行われ、埋め戻された堀跡が見つかっています。No.26では御陵の参道内で下水道設置工事に伴って立会調査が実施され、石垣の石材が分布していることがわかりました。石垣が壊されて散乱している状態です。現在その石材は参道脇に並べられて見学できます。石材には刻印や矢跡が認められ、貴重な伏見城の資料です。

#### 【武家屋敷区域】

武家屋敷区域は東部・西部・南部とも、それぞれ成果が上がっています。まず、伏見城東麓に位置するNo.1(桃山町紅雪)は1977年に宅地造成中、偶然に石垣が発見されました。石垣は全長41mにわたり、高さは0.8m~1.2mで石が2段分残っていました。石垣には3種類の墨書が確認されています。写真撮影と測量の後、その一部が桃山東小学校に移築され、京都市の登録史跡に指定されています。

上板橋通りと直交して南北に通る伊達街道に面したNo.4では、伊達街道の路面と石組みの側溝・礎石建物が検出され、2回の火災を受けていることが判明しました。伏見城の大火の回数は7回を確認できますが、どの火災に相当するかは特定できていません。No.3は松平伊予守屋敷、No.4は山内土佐守屋敷と推定されています。No.21は上板橋通りの拡張工事に伴う調査で、路面・石組み側溝・石垣を約300mにわたって検出しました。石垣と側溝は2時期が認められます。南側の武家屋敷へ入る門へ続く石垣の切れ目も見つかりました。

御香宮の西側のNo.12（桃山町金森出雲）では門跡が良好な状態で検出されました。門跡は西側の南北道路に面して建てられ、遺構は焼け瓦を含む焼土層に覆われていて火災を受けていることが明らかです。また、門の礎石などの施設が完全に残っており、扉を内側へ開く型式です。金森出雲屋敷推定地にあたりますが、屋敷本体は伏見城廃城に伴う屋敷移転によって破壊されたものか、建物は明確ではありません。

No.13（桃山町松平筑前）では礎石建物・掘立柱建物・柵列・井戸が検出されています。調査区西端で見つかった建物は、小さな礎石を用い狭い柱間隔です。主屋と付属建物が明確にわかります。整地層が2面あり、下層の建物4は西へ4度振れ、上層の建物1はほぼ真北方向です。東部では数条の柵列が見られ、西へ振れるものと真北方向のものがああります。下層の整地層は豊臣期、上層の整地層が徳川期とされています。

No.16（西奉行町）No.17（片桐町）は桃山時代には富田信濃守屋敷、江戸時代は伏見奉行所となり幕末の鳥羽伏見戦いまで続きました。奉行所は造園家で有名な小堀遠州が奉行として、この地へ移転してきて長期間をかけて造営しました。No.16では小規模な門跡や池があり、池からは金箔瓦を含んだ多量の瓦が出土しています。No.17では江戸時代後期の同心屋敷が良好に遺存しています。屋敷の区画が良くわかり、建物に伴ってそれぞれに蹲踞と水琴窟が設けられています。

No.18（桃陵町）は山口駿河守屋敷と推定され、掘立柱建物・溝・大土壙が検出され、多数の金箔瓦も出土しています。大土壙は建築用の土を採取した後、ゴミ捨て穴として利用したと考えられています。

No.23（桃山筑前台町）は住宅建築に伴う立会調査で、前田利家邸に想定される地点にあたり、多量の金箔瓦が出土しました。また、No.13地点の南側で大手筋に沿った桃山町松平筑前の住宅建築に伴う立会調査でも、まとまった量の金箔瓦が出土しています。

No.27は国道24号線に面した調査地で、道路側溝と門跡が見つかりました。

#### 【町屋区域】

城下町の西部にあたるNo.6（京町・両替町）No.10（今町）No.11（東組町）は町屋が展開していたらしく、武家屋敷推定地と比較して遺構・遺物の様相が異なります。桃山時代から現代まで町屋として延々と続いてきたようで、建物・井戸・柵列・土壙などが重複して検出されます。また陶磁器・土師器などの土器類、漆器・箸・下駄などの木製品、文字の書かれた付け札などが出土しています。

No.14とNo.22（桃山町立売）は立売通に面しており、調査区南半に立売の建物らしい礎石建物が検出されました。立売の北側は浅野但馬守屋敷と推定され、調査区からは浅野家の家紋である違鷹羽文軒瓦が出土しています。No.14では建物跡が焼土層を挟んで2時期があり、火災にあい建て替えられたものです。No.22では立売通の路面と側溝が検出され、道路に面して町屋跡が並んでいることが判明しました。町屋跡は小さい礎石を用いた建物で土間と床張りが認められ、カマドも付設しています。建物はNo.14と同様火災を受けており、地震による地割れも検出しました。火災は慶長10年（1605）の立売町の大火によると思われ、地震の地割れは層序の関係から寛文2年（1662）の地震に相当すると思われています。建物の後ろは井戸やゴミ穴などが掘られています。

No.25は伏見区役所の建替え工事に伴う調査で江戸時代の墓地が検出されました。墓の副葬品などから江戸時代の伏見に住んでいる人たちの様子が明らかになりました。

#### ま と め

城郭の東・南・西に武家屋敷が展開しますが、明治22年の仮製地図をみると、城郭西側の城下は整然とした地区割りが認められるに対して、城下の東側と南側には武家屋敷の縄張りの痕跡を探すのは困難です。おそらく、東側と南側は地形を重視した縄張りでしょう。城郭部分も旧地形を利用して、堀や土塁を築いています。西側の正方位の町割りに合わない道路として、大手筋東部とその南側に平行している立売通りがあります。北側の土塁の方向に反して北に対して西へ傾く方位です。立売通りの南側が指月の森で、ここに秀吉による最初の指月伏見城が想定されています。指月伏見城に隣接した立売通りと大手筋は、豊臣期当初の町割りの方位を残している可能性があります。

発掘調査で検出された造営時の整地層や地割りに関係する遺構の方位を検討することによっても、各造営期の縄張りを考える材料となります。城下の西半部では仮製地図で確認できる地割りに沿った遺構とその下層では、方位の異なる遺構が存在します。正方位に近い地割りと、その下層がいつの時期の造営かが問題となります。現在も造営最終の町割りが踏襲され、伏見の町を形成しているわけですが、豊後橋から京町通り大和街道という交通網や伏見湊の造営といった流通のことを考え合わせると、この町割りは豊臣秀吉の造営と思われます。文禄三年（1594）に城下町造成のため、寺社村落の移動や槇島堤による宇治川の付け替えという大土木工事を行っています。この時に地形に合った城郭と地割りを実施し、また、木幡山の堀や土塁の工事も文禄三年の段階で開始されていたことが考えられます。慶長の大地震後、木幡山の頂上に天守を移したのに合わせ、西側の武家屋敷地区を正方位にして、町造りを行ったと思われています。また、正方位に近い地割りは古代の紀伊郡の条里制が影響していると類推できます。徳川期には伏見城の再建や、石垣の修築の記事が確認できます。家康・秀忠・家光と三代にわたって伏見城で将軍の宣下を受けているため、城郭の再建と道路の整備を行ったことは十分に考えられますが、二条城の造営が行われている時期でもあり、地割りのやり直しまで含めた城下町の再整備は無理があるように思えます。

金箔瓦の出土は広範囲にわたっていますが、家紋瓦の問題など、出土瓦からみた武家屋敷の検討はまだまだ未整理で、今後の資料増加が期待されます。

伏見城関係略年表

年号	西暦	記	事
寛治7年12月24日	1093	橘俊綱の臥見亭焼亡（指月付近）	
文治2年1月19日	1186	後白河法皇、伏見御所に渡御	
永禄11年9月26日	1568	織田信長、足利義昭を擁して入京	
永禄12年2月2日	1569	織田信長、将軍義昭の二条御所（旧二条城）造営着手	
天正10年6月2日	1582	本能寺の変、信長自刃	
天正10年6月13日	1582	山崎の合戦	
天正11年8月	1583	羽柴秀吉、大坂城造営開始	
天正14年2月21日	1586	豊臣秀吉、聚楽第造営開始	
天正19年	1591	秀吉、御土居を築く	
文禄元年3月	1592	秀吉、朝鮮出兵を命ずる（文禄の役）	
文禄元年8月20日	1592	秀吉、伏見指月に新城の造営を始める	
文禄2年閏9月20日	1593	秀吉、伏見城に移り、諸將近辺に第館を設け始める	
文禄3年3月18日	1594	淀城天守と矢倉、伏見城に移築	
文禄3年10月	1594	前田利家、秀吉の命により宇治川に槇島堤を築く	
文禄3年	1594	伏見城下町造成のため社寺村落の移転	
文禄4年7月8日	1595	秀次官職を奪われ高野山へ、秀次自害	
文禄4年7月28日	1595	聚楽第破却、伏見城に移築	
慶長元年1月	1596	毛利・小早川などの大名、淀川に太閤堤を築く	
慶長元年閏7月13日	1596	大地震のため伏見城倒壊	
慶長元年閏7月14日	1596	秀吉、伏見木幡山で伏見城再建にかかる	
慶長元年10月10日	1596	新伏見城（木幡山）の本丸完成	
慶長2年1月	1597	朝鮮へ再出兵（慶長の役）	
慶長2年5月4日	1597	伏見城の天守閣完成、秀吉と秀頼大坂城から移る	
慶長3年8月18日	1598	秀吉、伏見城で死去	
慶長5年8月1日	1600	西軍伏見城をせめる 伏見城陥落、鳥居元忠自害	
慶長5年9月15日	1600	関ヶ原の戦い、東軍が西軍を破る	
慶長6年1月	1601	伏見城再建	
慶長6年3月23日	1601	徳川家康、伏見城に入る	
慶長6年5月	1601	伏見に銀座をおく	
慶長7年5月2日	1602	二条城の造営開始	
慶長7年6月1日	1602	伏見城の増築始まる	
慶長8年2月12日	1603	徳川家康、伏見城で征夷大将軍の宣下	
慶長10年4月	1605	秀忠、伏見城で将軍宣下	
慶長10年12月26日	1605	伏見立売町焼亡	
元和5年8月	1619	伏見城の破却決定	
元和9年7月	1623	家光、伏見城で将軍宣下、その後、廃城破却 天守は二条城、石垣は大坂城へ	
寛永9年	1632	伏見奉行所、小堀遠州によって富田信濃守屋敷に移転	
寛文2年5月1日	1662	大地震により、被害甚大 余震七日に及ぶ	
慶応4年1月3日	1868	鳥羽伏見の戦い	
明治45年7月30日	1912	明治天皇崩御、御陵が伏見桃山の地に決定	
大正3年4月11日	1914	昭憲皇太后崩御	
昭和39年	1964	伏見桃山城模擬天守を鉄筋コンクリートで遊園地内に復原	

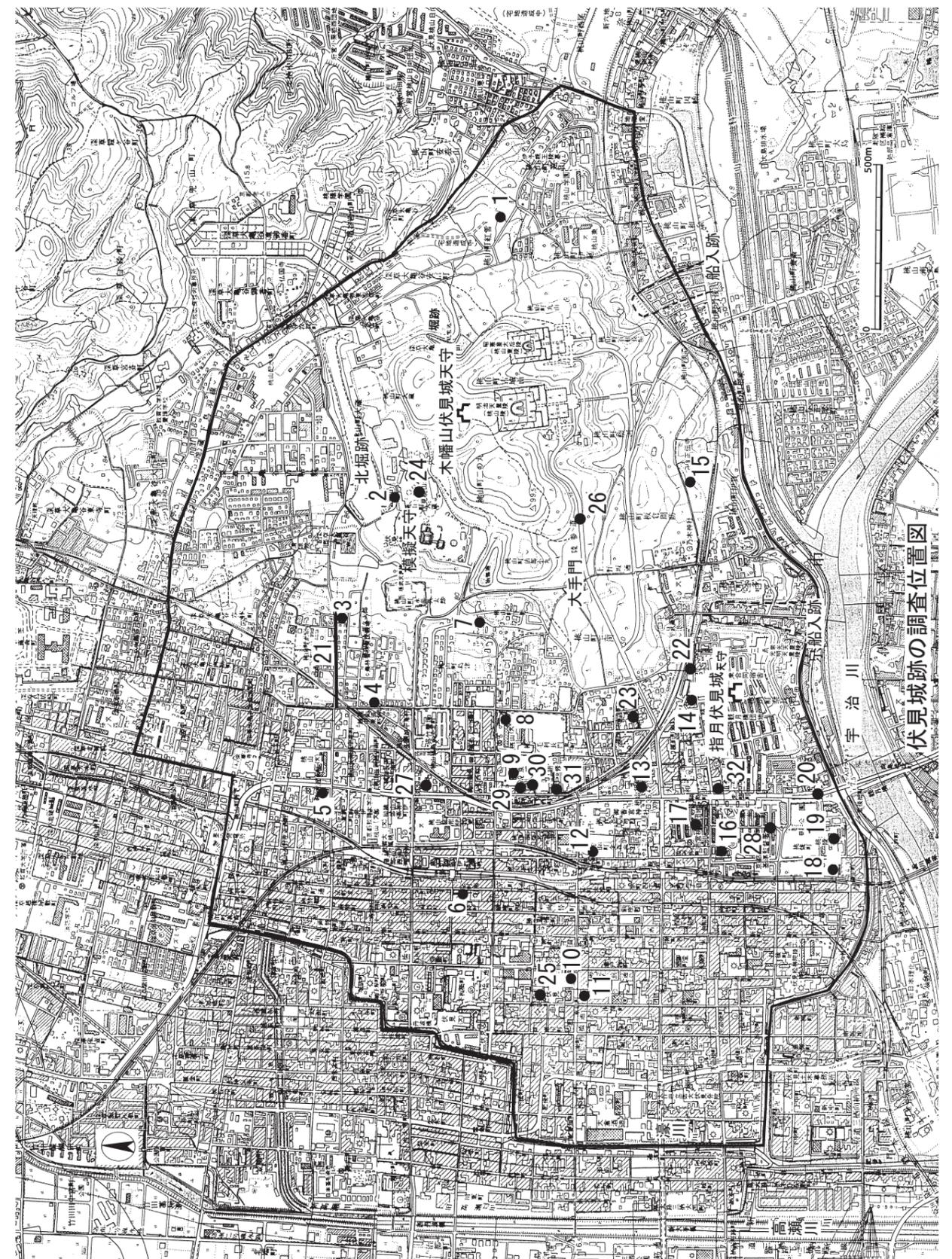


図1 伏見城の調査位置図

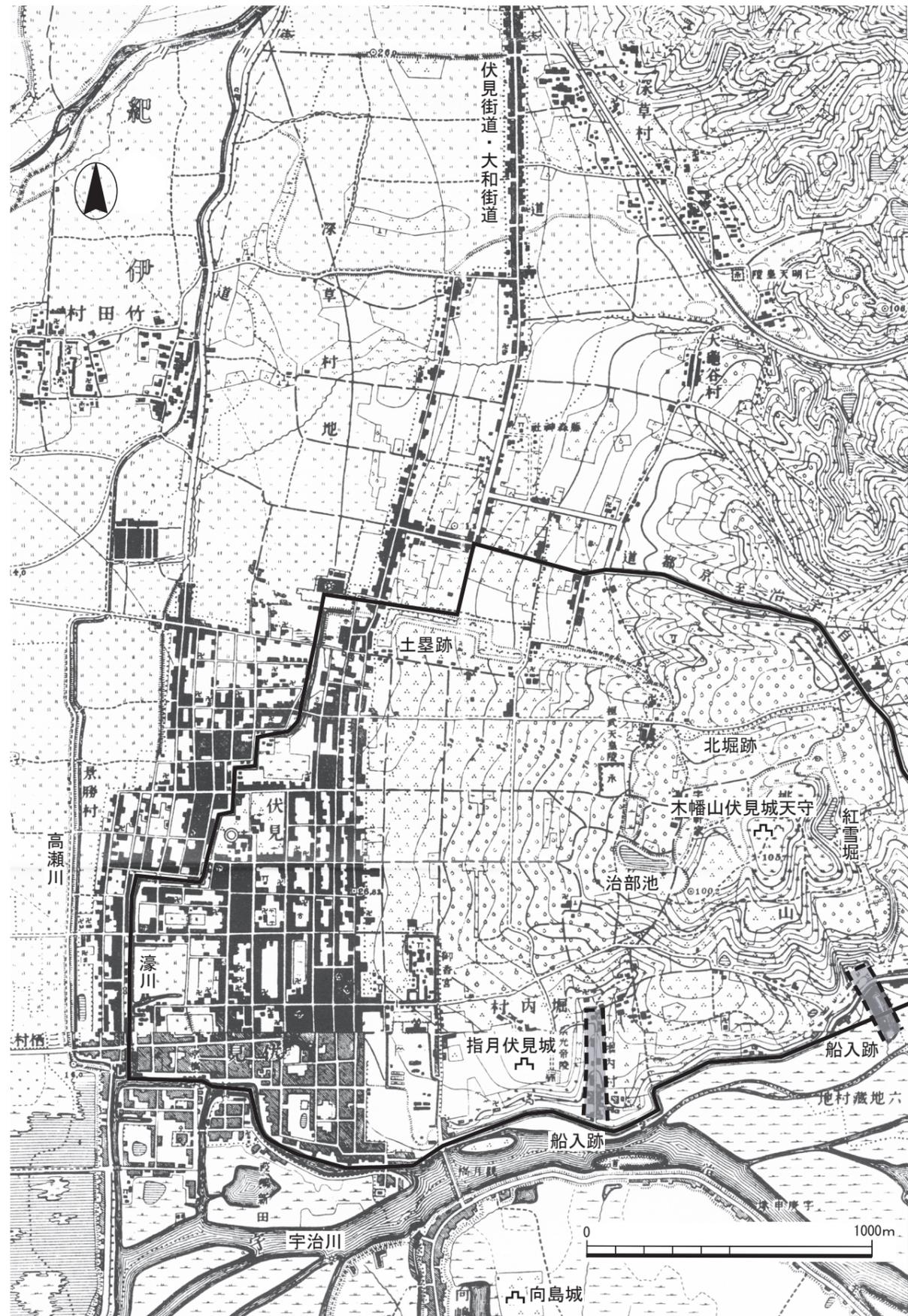


図2 明治22年の仮製地図



図3 伏見城古絵図